

第一話 阿久比のあけぼの

(1) アキクヒの神

阿久比神社縁起

大昔のことでした。

この地はまだ開かれておらず、人々は、農耕の道にうとく、毎日、獣けものを追い求め、木の実を拾い、貝をさぐって、その日を過すごすのに精いっぱいせいの生活をしておりました。

ある晴れた日のことです——。

阿久比の穏やかな入江（当時、この地の低地は、深く入り込んだ海辺になっていました）を昇る太陽を背に、一そうの小舟が流れ着き、この地では珍しい白い衣服を身につけた一人の長身の男が岸に降り立ちました。

「おい、変なやつがやってきたぞ……。」
獣や木の皮で、わずかに身を包んだこの土地

の人々は、最初は、木や草の陰から、じっとその男のしぐさを見守っていましたが、警戒の色が次第に好奇の顔つきに変わり、おずおずと集まりだしてしまいました。

その不思議な男は、人々に向かって語りかけます。

「わたしは、アキクヒの神と言い、いま高天原たかまがはらで世界を治めておられるアマテラス大神の父君の、イザナギノミコトの下袴したばかまから生まれた神である。

のう、この未開の地に住む人々よ。この地はまことに穏やかで、深い入江もあり、清らかな清水の流れる森や林に囲まれている。

わたしは、この地が気に入った。

だが、ここに住むお前たちは、いつも飢え苦しんでいる。それは、毎日食べ物を追う生活を続けているからだよ。

さあ、今日からは、わたしの言うとおり、水の流れ込む地を切り開いて田を造り、わたし



が与える種をまいて、米を作りなさい。

また、お前たちの体は、寒さに小刻みに震えている。わたしは、お前たちが暖かく毎日をお過ごしができるよう、布織る技も教えよう……。」

——それからというもの、この地の人々の生活が、だんだん変わってゆきました。

男たちは、木の鋏くわで、入江に流れ込む小川の周辺を耕し、女たちは、野山の麻あさの皮をはぎ、機織はたおりに精を出しました。

そして、森の木々がだんだん模様染まり始めるころ、田には黄金の重い穂が頭を垂れ、人々はさつぱりした白い着物で身を包んでおりました。

——そして、その明くる年の春のことです。

神の教えに従ったために、初めて厳しい冬にも凍こえることなく、腹いっぱい、極楽のような日々を送ることができた人々は、神から突然、こんな話を聞かされました。

「わたしは、すべてを教えた。だから今、ここから去っていくことにする。」

泣きながら、アキクヒの神を見送った人々は、高台に社を建て、毎年季節の変わり目ごとに、白い服を着けてお参りをし、いつまでもその徳をたたえてきました。

阿久比神社



— 阿久比神社 —

延喜式所載の知多三社の一つ、当町の阿久比神社は、社伝によれば、第23代額宗天皇のころ創建(今から約千五百年前)となっており、開闢神を祀り、大化4年に、猿田彦神・天津彦命・瓊々杵尊を合祀、その後、英比磨が社殿を造営したと伝えている。

ただ、現在地がやや低地であることから、その前地を権現山と推定する旧半田町誌や、江戸時代松平君山によって編まれた尾張志では、北原天神を比定する説など、異論がある。

(2) ヤマトタケルノミコト

① 帰らぬ船出

わしのような老人としよりに、なんぞお尋ねがありますかの……。え、なぜこの村を宮津と言うのかって……。

ああ、そのことにつきましては、ご先祖さまから、こんな言い伝えを聞いておりますわい。

昔、昔のことだったそうなの。都には、景行天皇という天子さまがおられた時とか。今から何年くらい前のことなのか、わしのような者には、とんと分からぬ、それはそれは大昔のこととしてのう……。

今の阿久比川を挟む田んぼは、そのころは深く入り込んだ青い海だったそうなの、ある

春の穏やかな日に、海には、時ならぬ立派な大船が幾そうも並んでいて、岸から大勢の兵士たちが乗り込み、紺青こんじやうの海に真つ白な帆を輝かせながら消えて行つたという。

そして岬みさきには、たくさん家来衆を従え、玉をちりばめた剣けんを腰にはかれた、見るからに身分の高そうなお方と、それはそれは美しいお姫さまとが、次第に小さく去つてゆく船影に、いつまでも、いつまでも手を振つておられたそうなの。

なんでも、その尊いお方は、都の天子さまのお子で、ヤマトタケルノミコトさまと申され、ご命令を受けて、陸路東国征伐にお出かけの途中、ミコトの味方をされた尾張の国造くわいぞうタケイナダネノミコトが、海軍を率いて東国へ向かわれるのを、ここまで見送りにおいでたのだそうなの。

え、そのお美しいお姫さまは、どなたかたつて……。

そのお姫さまは、なんでも、タケイナダネノミコトの妹むすめごさまで、ミヤズヒメと申され、ヤマトタケルノミコトさまが兄君あにきみの館やかたをお尋ねなされたとき見染められ、東国征伐が終わつたら結婚しようというお約束ができていましたそうなの……。

え、なんですかの……。

ミヤズヒメがおいでた所だから、この村を宮津みやつというのかつて……。

はい、そうとも考えられましようがの、ここには、阿久比三の宮の熱田明神さまのお社やしろがあり、タケイナダネノミコトの率いる尾張氏の一族の人がここで知多を治めておいでになつたが、そのころは今と違つてここが立派な港になつておつたので、お宮のある港という意味で、宮津みやつというのだと聞いております。さあ、どちらをとるか、わしらには、よう分かりませんがのう……。

② 二子塚

さて、どこまでお話をしましたかの……。
そうそう、この宮津から、ヤマトタケルノ
ミコトさまとミヤズヒメに見送られて、タケ
イナダネノミコトの船団が船出したところま
ででしたかの。

ヤマトタケルノミコトさまは、無事東国征
伐を終えて、陸路尾張へ帰っておいでだが、
船でお出かけのタケイナダネノミコトには、
大変な事が起こっていましたのじゃ。

勝ち戦（くさ）の帰りの船の中で、ミコトは真っ白
な鳥がへ先に止まっているのを見つけられた。
みやげにと捕えようとしたとき、突然船がぐ
らりと揺れて、ミコトは広い海へほうり出さ
れてしまった。

さあ、大騒ぎになってしもうた。しかし、



何度捜しても見つからぬ。船団は悲しくこの港へ帰ってきたのだが、その後、ミコトの衣が流れ着いたので、この海を衣ヶ浦と名づけたのだそう……。ミコトに代わって兵士を統率して帰った丸氏とか和迺氏とかいう一族は、とうとう阿久比谷にとどまって、知多を治めることになったという。——そんなふう聞いておりますがのう……。

「あんたも聞いとられると思いますが、ヤマトタケルノミコトは、ミヤズヒメと結婚され、ヒメのもとに宝剣を残して伊吹山へ向かわれ、そこで病に倒れましたので、ヒメは、熱田にお社を建てて、宝剣をお祀りなされました。それで、この地の丸氏も、その分社をここへ祀りましたが、その因縁で、今でも5月8日におためしがあります。その丸氏のお墓が二子塚の古墳ということで、大場・泉城・折戸などというゆかりの地名も残っておりますとか……。

熱田社・二子塚



— 熱田社 —

考古学で、古墳時代と言われる時期は、天皇家の直轄地である屯倉と大和の豪族たちの支配地田莊を地方に設け、大和朝廷の力を全国に及ぼして統一を進めた時期に当たっている。

古墳には、いろいろな形式があるが、宮津にある二子塚は、前方後円墳という日本独特の形式で、五〜六世紀ごろの阿久比が、大きな生産力と統治力を持つ豪族に支配された先進地であったことを伝えるものとなっている。

熱田社は、創立年代は不詳だが、社伝によれば、日本武尊の東征に随った丸(和迺)氏の奉祀した社で、英比磨が領主となつて祭事を司どり、後、その子孫新海氏が受け継いだと伝えられている。



— 二子塚 —

(3) 月宮姫

風のないだ仲秋の夜半は、空気もいつそう澄んで、ひんやりと、少し膚寒さを覚えさせました。

坂部の、とある農家の縁はたでは、その家の老婆が幼い孫娘に話しかけておりました。

「ほら、見てごらん。あんなにきれいなお月さんが出ているよ。お婆ちゃんがあんたくらいのころは、旧暦の8月15日を芋名月、9月13日を豆名月と言ってね、両方ともおがまなといいかんと、どこの家でも庭に床台を出して、お供えしたダンゴや果物を食べながら、お月見をしたもんだよ。」

あ、そうそう、お月さんといえは、この坂部に月宮姫さまのお塚というのがあることをあんたは知っておるか。」

「ううん、わたし知らないわ。ねえ、お婆ちゃん、その月宮姫さまって、どんな人なの。」
「じゃあね、ちよっとだけ、そのお話をしようかな……。」

老婆は、遠い昔を夢見るように、月の光で煙って浮かんでいる遠くの丘を見やりました。

「それは、うんと大昔のことだったそうなの……。ここには古い神様のお社があつて、そこに、月宮姫さまという巫女さんが住んでおられた。どこからおいでたのか、村の人はだあれも知らなんだが、それはそれはお美しい、透き通るようなお方だった。」

今年もたんとお米がとれますようにと、お宮へお祈りに行くと、赤い袴に白絹の衣を着けた月宮姫さまが、白沢から取つておいでた片葉の葦を手に、神様の前で、きれいなお声で歌を歌いながらさらさらと舞を舞われた後、今年の米のできぐわいや天候災害など、神様のお告げを伝えてくださる。それで、村人た

ちは、お姫さまをとつても敬い、大切にお守りしてきたそうだ……。

ところが、その月宮姫さまが十八になられ



た年、ふとした病いがだんだん重くなり、こんな明月の夜だったそうだが、村人にみとられながら死んでしまわれた。もうみんな、宝

の玉を失ってしまったように悲しみ、泣く泣く今の東新畑ひがしんばたという所に葬ほむったそうだが、だれ言うことなく、そのお墓にお参りすると、姫さまのような美しい女の子になれるというてね、みんなが行くようになった。あんたもあした連れて行ってあげような……。」

孫娘は、こくりとうなずいて、中天のお月さまを見上げました。

お塚さん



— 月宮姫塚 —

大昔の祖先は、自然の脅威おそろいを強く感じ、それを神として敬い、吉凶は神意と考えてきた。だから、神に仕える聖職者、特に巫女みこが神託の伝達者

として、また、部落の支配者として、非常に尊敬されてきた。月宮姫つきみやひめの伝説も、そうした女性の一人と考えられ、こつした伝承を持つ坂部の部落の発生は、相当古かったと思われる。土地の人はその墓を「お塚さん」と呼んでいる。

第二話

坂部連葉

「父上、どうしても大和にお帰りになるので
すか……。」

齊明天皇の4(六五八)年、坂部連葉が尾張
の国のこの地に流罪となつてから、すでに五
年のなかばが過ぎようとしていました。

なだらかな丘すそに構えられた屋敷の中で、
葉は、対座して、食い入るように見つめてく
るわが子の顔から、そつと、穏やかな入江の
青い反射へ目をそらせました。

「……わしは、このごろ、この里が好きになつ
てきた。できることなら、ここで平穩な一生
を過ごしたい。……だが、あの皇太子、まだ
即位はされていないが、すでに天皇になつて

いる中大兄皇子のご命令は、拒むことはでき
ぬ。……あのお方は、恐ろしいお方だ。

蘇我氏を倒して、大化の新しい政治を始め
られた皇子は、その後、将来障りとなる者を、
事を構えては、次々と葬り去つてこられた。

皇太子の命を受けた赤兄の誘いに乗せられ
た若い有間皇子も、悲しい歌を残して、多く
の従者と共に、藤白坂の露と消えられたが、
なぜか、わしらだけは流罪にとどめられた。



そなたも知っていようが、朝鮮半島では、新羅が百済を攻め亡ぼし、大和の丘は唐の水軍に大敗して、今は北九州の防備に忙しい。すでに、上毛野国へ流された守君も、大和へ帰って、唐の国との交渉に当たっているそうだ。

皇太子は、わしをも召して、そのことに当たらせるおつもりに違いない。……だが、あのお方は恐ろしいお方だ。……はらわたの煮える思いでも、わしは、大和へ帰らねばならぬ……。」

屋敷の周りも、入江の向こうの丘も、松林は黒ずみ、一帯の景色は、紗をかけたように煙っていました。

そんな風景をいとおしむように眺めやった薬は、今度は、強いひとみで、わが子を振り返りました。

「だが、おまえだけは、ここにどまつてほしい。大和は、うわべのはなやかな下に暗い

謀略ばかりが進んでいる。

この地は、まだ開けてはいないが、里人の心は温かい。土は豊かな稔りを約束し、焼き物にも適している。おまえの優れた技で、額に汗して取り入れたうまい米を、丘で焼き上げた壺にかもして、談笑しつつ飲む喜びを、里人に味あわせてやるがよい。」

——そして、その翌日、隊列が、阿久比の山裾の道を北へ遠ざかって行きました。

薬と地名

日本書紀斉明帝4年の項に、坂(今)部連薬が有馬皇子の事件に連座して尾張に流された記事がある。江戸時代の津田正生という学者は、その著「尾張地名考」で、坂部や草木という地名から見て、薬の流刑地は当地で、英比屋は、かれと深いつながりがあるのではなからうかと書いている。

わが国の古代には、天皇家やそれを取り巻く大豪族の間で、血を血で洗う権力闘争がくりかえされたことは、和歌森太郎著「陰謀の古代史」に詳述されており、有馬皇子も登場している。

第三話

英比磨物語

(1) 呱呱の聲

延長^{えんちやう}2年（今から約千百五十年ほど前）の春さきのことでした――。

深く入り込んだ阿久比谷の海辺には、さざ波が静かに寄せ、輝く太陽が岬の丘から高く昇りかかったころ、銀波の中を、この地では珍しい白帆を高く掲げた一そうの船が、しずしずと入ってくるのが見えました。

「おーい、大きな船が入ってくるぞー。」

ちやうど磯へ出て藻^もを拾っていた里人の呼び声で、次第に人々が波打ちぎわに集まり出し、だれが知らせたのか、里長^{さとおさ}までが、小者^{こもの}を連れて顔をのぞかせたころ、数人の人影がはしけに揺られて白砂の岸に寄り着き、伴人^{ともびと}

を従えた都風の貴公子が静かに人々のかたまりへ歩みを進めていました。

「磨^{まろ}は菅原道真^{すがはらみちざね}の直系の者である。延喜^{えんぎ}の初め、帝^{みむ}に重く用いられていた父道真公は、藤原一族の謀略^{だざいふ}で太宰府の閑職に流され、そこで没せられた。われらも、そのことに座して尾張^{ゆわい}に幽閉せられてあつたが、都には天変地異が相續き、これは亡き父君の御霊のたたりに違いないとの世評で、帝も、元の官位に復されて北野に神と祀^{まつ}られた。われらにも、早々都へ立ち戻るようお召しがあつたが、長い間幽れ^{とわ}の身であつた磨は、藤原氏専横^{せんわう}の宮仕えはうとましく、心温まる地にとどまって、静かに憩^いいたいと考えた。

国の守^{かみ}の話によれば、この里は、知多の郡の中ほど、入江は深く穏やかで、清らかな大河あり、物成り豊かで、里人^{さとびと}の心も素直と聞いた。よって、特に帝に乞い、里を中心とする英比莊を賜ふことの勅許を得たゆえ、ただ



今、まかり越した。どうか、よろしく頼み入る。」

「たとえ一時は流されてこられたお方とは言え、身分の高い都人から、思いがけないいねいな言葉をかけられて、里長をはじめ、里人一同、感激して、地に深くひれ伏すのでした。そして、またたく間に、二年の歳月が過ぎ去っていました。」

「おおい、聞いたかや。里長さまのお屋敷で、珠たまのようなお子がお生まれなさったそうなの。」

「おお、そのことよ。お館くわんさまはたいへんお喜びだし、初めてお祖父じいさまとなられた里長さまは、笑いで口がしまらぬ有様だとか……。」

「なんでも、お館くわんさまは、里長まろさまが丸まる氏の直系ゆえ、荘の名と合わせて「英比磨えひまろ」さまの幼名おとみなをつけられたと聞いた。」

「のう、お館くわんさまは、すっかりこの地になじまれ、わしらの困りごとや訴えを、だれもが納得するよう裁いてくださるし、読み書きま

で教えてくださる。お子が生まれたことだし、長くどどまってくくださるとよいがのう……。」

(2) えびの子

阿久比の里は、入江へ寄せる細波さいなみや、取り巻く丸い丘のたたずまいのように、いつも穏やかで、笑顔に満ちており、その中で英比磨は、お館や祖父の里長をはじめ、人々の慈愛を一身に受けて、愛くるしく、丸々と育ってゆきました。

英比磨が五歳の春を迎えた時のことです。都から勅使が下向げこうされる旨の知らせが届きました。国の守からの時ならぬ早馬の知らせに、里人たちはうるたえ、出迎えやら供応の支度などで走り回ることになりました。が、お館だけは、下向の真意を察しているらしく、今までのように気軽に見回りに出ることもな

く、ひきしまった顔で、家に閉じこもりがちになりました。

旅の日焼けで、一層突とがり気味の顔となった勅使は、いかにも都の権威を一身に背負ってきたような気負いを見せて上座へ通ると、田舎いなかの建物のしつらえを軽べつするかのよう



に、じろじろと見回したり、貧相なあごひげをしごいたりしていました。

父に伴われた英比磨は、勅使の前に進んで、深く腰をかがめて一礼しました。しかし、その愛くるしい動作も、勅使に一層さげすみの感情を増させたらしく、童子の顔をのぞき込み、問いかけるように口ずさみました。

「をさな心にかがみこそすれ」

ところが英比磨は、即座に、よく通る声で、その上の句をつけたのです。

「英比の子は生まるるより親に似て」

勅使の顔に、アツというろ・う・ばい・が流れ、そして、それは、次第に感動の色に変わってゆきました。

「良いお子をお持ちなされた。さすが菅家のお血筋じゃ。」

「いや、まだ幼うござる。何とぞ、ご無礼はお許しを……。」

「なんの、磨は、心をいたく動かされ申した。

この郡は、智恵多しと書く。このお子は、まことにこの郡にふさわしい。帝へよい土産がでし申した。」

英比磨が退出したあと、すみやかに都へ帰り、内裏に出仕せよ、違背はならぬと勅命が伝えられ、里長の厚いもてなしと数多くの贈物を受けて、勅使は帰って行きました。――

(3) 蟹田川

都に召し出された父からは、度々上京の催促がありました。里人の願いで、英比磨はこの里から離れませんでした。都の父も、行く行くはこの荘を治めさせようと考えられたか、書籍を送り続けられました。

「英比磨さまあ、またお勉強ですの。」

「ああ、阿古女か。今、父上からいただいた漢詩集を讀んでいるところなのだよ。ところ

で、里長さとおさの家には大勢の人が集まっているよ
うだね。」

「ええ、蟹田川がんだの堤がくずれて、ご先祖さま
の二子塚が傷みそうだと、手だてを相談して
いるらしいのよ。」——

「あ、これはこれは、英比磨さま。お聞き及
びのとおりでございますが、なんぞ、よい手
だてはないものでしょうか。」

「この間読んだ本の中に、『東に流水あるを青
竜りゅう、西に大道あるを白虎びやくこ、南にくぼ地あるを
朱雀すうてい、北に丘陵あるを玄武げんぶ、これ吉相なり。』
と書いてあった。これに従って、いま北を流
れている蟹田川を、塚の東を流れるように変
えたらよい。」

人々は、英比磨の学識の深さに驚嘆しまし
た。——

さて、青年期を迎えた英比磨は、いとこの
阿古女と愛し合うようになりました。そして
二人の恋が里人たちのうわさに上り出したこ

ろには、二人は結婚の約束をしていました。

英比磨は、里長の許しを得て、入江の対岸
に新しい館を造ってもらい、新妻阿古女かたの方
と移り住みました。甘い二人だけの日々が続
きます……。

阿久比の里に、また春が帰ってきました。
ところがこのごろ、英比磨が無口になり、妻
の問いかけにも言葉を濁すようになりました。
何か、重大なことで、思いやんでいるに違
いない。阿古女は独り胸を痛めました。

そして——、ある日、阿古女は、夫の文箱ふばこ
から、都の父君の便りを盗み読みして、真つ
青になりました。それには、必ず都へ出てく
ること、一族の姫君をめあわせたい考えであ
ることなどが書かれていたのです……。

阿古女の方は、目の前が真つ暗になる思い
でした。すでにお腹むかの中には、英比磨の子が
宿っていました。……しかし、自分は、里長
の一族とは言え、都の父君の許しを受けぬ身、

阿古女はさめざめと泣き続けました。

(4) 英比の白袴

英比磨の館に、都から奥方が下つてこられました。菅原氏一族の出で、都育ちで上品な美しいお方でした。阿古女の方が去つてしまわれた館の中も、ようやく明るさを取り戻してきたようです。

英比磨が都からこの里に帰ってみると、阿古女の姿がなく、代わつてみどり子を抱いて現われた里長夫婦が、阿古女が、英比磨の将来のため、泣く泣く身を引いたことを告げました。英比磨は、あらゆる手だてを使って必死に捜しましたが、妻の姿は、どこにもありませんでした。うわさでは、緑の黒髪を断つて、一人西へ去っていったということでしたが……。



英比磨は、母を失ったわが子をいとおしみました。そして、美しい入江にちなんで、新海丸と名づけ、里長に、大切に育ててくれるよう、幾度も幾度も頼みました――。

結局、英比磨は、都の父の言うとおりに、奥方を迎えることにしました。そして、その翌年には、奥方は玉のような男の子を生みました。英比磨は、丘の青松にちなんで、この子には久松丸と名まえをつけ、共に分け隔てなくかわいがりました。奥方も心優しい人がらでした。

落ち着いた英比磨は、里人を指図して村づくりに励みました。まず、山を削り、浅瀬を埋め、川堤を固めて、田畑をふやし、いくつかの里を造らせました。そして、里々をくまなく回り、人々の訴えをよく聞き、穀物の増産と税の軽減をはかりました。それで、里人たちは、かれを慈父のように慕い、毎年、年の初めには、全員が白い袴を着けて、館へ年賀に上がることを常としました。白い袴は、

里人の清らかな敬いの心を表したものでした。都では、この地のおいしいお米とともに、「英比の白袴」は、有名になりました。

こうして、英比磨の徳は、この谷はもちろんのこと、近隣にまでに及び、谷の各里には枝郷ができて、後の十六か村のもとができましたし、今の東浦町や半田市が、英比荘として開拓されてゆき、英比磨は、その始祖と仰がれました。

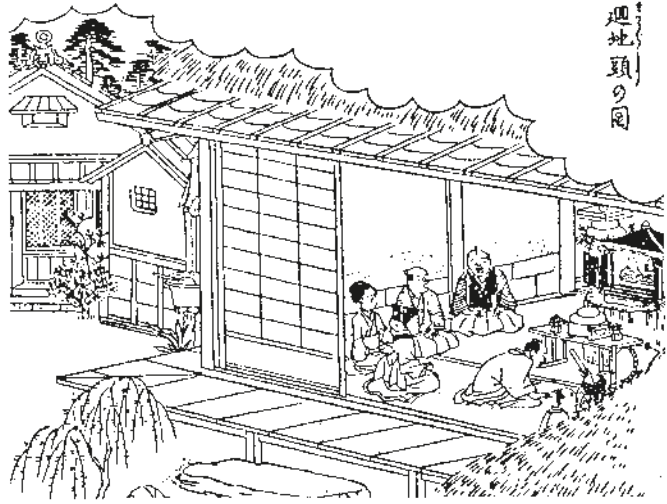
(5) 回り地頭

英比磨が仁政を施すようになってから、数十年の歳月が過ぎ去りました。

年老いた英比磨は、新海丸と久松丸をはじめ庄内の里長たちを集めて、隠居することを告げました。

「私は、すでに年老いたので、退くことにし

廻地頭の園



— 尾張名所図会から —

た。今後は、新海丸はこの谷の南半分を、久松丸は北半分を治めなさい。兩人とも、力を合わせて、里人の幸せのために尽くしてほしい。時の移り変わりによっては、この荘にも度々危機が訪れるかもしれないが、あらゆる手だてを講じて、菅家の血統を絶やすな。」——

英比磨が初めて荘内を巡視したとき、入江に大河が注ぐ河口付近は、広い沢地になっていました。そこには、丈の高い片葉の葦が一面に生い繁り、かれの来訪を歓迎するかのようには、数百羽の白鷺が群れ遊んでおりました。かれは、その美しい景色に見とれて、長い間たたずんでいました。この地を「白沢」と名づけよう、ここを開拓したら、きっと素晴らしい美田となるに違いないと考えました。

英比磨は白沢がたいへん気に入りました。そこで美田を見下ろす丘の八十間四方を神域と定め、ここに、祖先の菅原道真公を祀る北原天神社を造営しました。そして、入江を挟む東西の各里から、社に通じる天神街道を造って、人々に参詣をすすめ、自らも、毎月25日の参拝を欠かしませんでした……。

英比磨の隠居屋敷は、この社の傍らに建てられました。かれは、老妻とともに、毎日のお参りと里人たちとの談笑を何よりの楽しみ

として過ごしました。時には、緑の深い丘に腰を降ろして、付近の子供たちの遊びたわむれるの目を細めて眺めやったり、興がおもむけば、その子供たちを集めて、読み書きを教えたりもしました。功なりとげた後の、穏やかな日々が続きました。

さて、この荘の開祖と仰がれた英比磨は、天寿を全うして、永い眠りにつきました。里の人々は、慈父を失ったように長い間悲しみにくれておりましたが、英比磨夫妻の木像を造って、最近まで、各家へ一日ずつお迎えし、立白の上に新しいこもを敷いてその上に安置し、親族縁者を招いてお参りをいたしました。これは、英比磨はいつまでも生きておられて領内を巡視してくださるのだという思いで、その徳をたたえてきたもので、この地では、「回り地頭」とか「回り地蔵」と呼んでいます。英比磨の墓と回り地頭の木像は、坂部の洞雲院に祀られております。

阿久比の始祖



— 回り地頭 —

阿久比谷の開祖、英比磨については、古来いろいろの説がある。天神として崇められる菅原道真公は、宇多天皇に認められて右大臣にまで昇進したが、藤原時平の「齋世親王を帝位に就かせようとしている」というざん言で、北九州の太宰府に流され、延喜3(九〇三)年、配所で病没した。

その一族は、すべて各地へ配流されたが、当地の英比磨公は、長男高規の子雅規で坂部城の久松氏に続く(久松系図)とする説、四男淳茂の系統で宮津城の新海氏に続く(新海系図)とする説がある。その他、知多臣説、和迺氏説、坂部薬説、宇土君説などがあり、現在まで種々論考されているが、最近では、客人説や、天(雷)神崇拜の発展としての民間信仰として、民俗学の分野で考究すべきだとする学説も提起されてきている。

第四話

唐松の井戸

「今年の夏の日照りは、いつまで続くのだろう。あー、雨がほしい。」

「田んぼの水はおろか、井戸まで干上がってしまった。」

「そのうえ、子供がはやり病いにかかって、泣き止まんで、困っている。」

「夕立ちでもいい、ほしいのう。」

ここ角岡村（今の椋岡）では、何回雨乞いをしてもそのききめがなく、田んぼの稲が枯れ始め、飲み水すらなくなるありさまでした。おまけに、疫癘（えきり）がはやり出し、どこの家にも病人が高い熱を出して、苦しんでいました。

そのころ、都（京都）では、第53代淳和天皇

皇の御代でしたが、ある夜天皇は、鳳凰（ほうおう）という鳥が、何羽も群れをなして尾張の国へ舞い下りたという夢を見られました。そこで早速、比叡山（ひえいざん）の「慈覚大師（じかくだうし）」という偉いお坊さまを呼び寄せ、「汝（みづか）これから尾張に行つて、鳳凰を見てくるように」とお命じになりました。

大師は早速支度をして、京都から伊勢へ、そして船で知多郡（ちたごほり）へやってきました。

船を宮津へ着け、角岡村まで来ると、道に倒れている人、家の中から「水、水をくれ」と呼んでいる人、さながら、地獄のありさまでした。

大師を見つけた一人の村人が、「どうかお助けください。」とすがりついてきました。さとうなずいた大師は、そばにあった井戸をのぞいてみると、やはり一滴の水もありません。

大師は、道に落ちていた一個の石を拾い、泥を落として「南無妙法蓮華経」と書いて井戸の中に投げ入れ、一心不乱にお経を唱え始



めました。村人たちも、手を合わせて、一生懸命お祈りをしました……。

すると、不思議にも、井戸の底からチヨロチヨロと清水が湧き出し、やがては井戸いっぱいになり、しかも水面には、緑の松の影が映っているではありませんか。

「おお、水だ、水だ。」

と、のぞき込んだ村人たちは、その影に驚いて、思わず、あたりを見回しましたが、付近には、それらしき松の木はありません。

喜びと驚きといっしょになりながら、我先にとこの水を飲んで喉のどをうるおし、そして井戸を伏し拝みました。

その後、この井戸を「唐松からまつの井戸」と呼び、ありがたいお水だからと、正月の若水や延命水にと、遠方からも汲くみにくるようになりました。

現在も、椋岡の平泉寺から百メートルほど南の田の中に水をたたえています。

第五話

尾張不動尊

太郎君は、学校の宿題で郷土の伝説を調べることになり、早速物知りおじいさんに聞いてみました。

「椋岡の平泉寺に、魔除け不動、またの名を尾張不動尊という国の重要文化財にもなった立派な仏さまが祀られていることを知っているかい。」

「うん、名前だけは聞いたことがあるよ。」

「さて、その椋岡と言うのは、椋原村と角岡村という二つの村が一つになってできた村じゃ。その角岡という地名はな、今から千五百年も前のこと、村の西の山に一匹の鬼が住んでおって、子供をさらったり、村を荒ら

したりしたそうなの。村人たちは困ったすえに、領主の英比磨さまにお願いしたそうじゃ。

英比磨さまは、気の優しいお方だったので、早速家来と山狩りをして、その鬼を退治し、椋の大木の根元に埋めたそうじゃが、角のある鬼を岡に埋めたので角岡というようになったんじゃよ。」

「フーン、地名ができるって、おもしろいもんだね。」

「それからは村は平和になって、村人たちは百姓に精を出していたのだが、数年後の夏のことじゃ、その夏は日照りが何日も続いて、稲は枯れ、飲み水さえもなくなり、伝染病が流行し、たくさんの方が死んでしまったそうじゃ。」

村の人たちは、きつと閉じこめられた鬼のあたりではないかと言いつ出した。

そのとき、一人のお坊さまが通りかかり、『それでは、私がおたたりを解いてしんぜ

よう』

と言って、鬼を埋めたところへ行っただ。そうすると、地中から、

『わたしが鬼です。どうか、ここから出してください。もう決して悪いことしませんから』と泣いて頼むので、お坊さまは、ありがたいお経を唱えながら塚の柁の木を切り倒したそうなの。

塚から出てきた鬼は、何度もお礼を言いながらどこかへ行ってしまったそうなの、お坊さまは、切り倒した柁の木で、立派なお不動さまを刻みあげたんじゃないよ。」

「それが今、平泉寺にあるというわけだね。」
「そうなんじゃ。それからお坊さまは、村人たちといっしょに、お堂を造り、そのお不動さまをお祀りしたんじゃないよ。」

『これは悪魔除けの不動尊だから、よく信心しなさい。』

と言って、この地を去って行かれたんだ。



このお坊さまは、慈覚大師じかくといって、唐松からまつの井戸に水を湧き出させた、偉いお坊さまだったんだよ。

それから四百年くらい経った文永11年、蒙古の大軍が日本へ攻めてきたとき、天子さま

のご命令で、日本中のお宮やお寺で敵国降伏のお祈りが行われたが、この平泉寺でも、村人たちが一生懸命お不動さまを拝んだので、そのかいあって、神風が吹いて蒙古の船は全部沈んでしまったんだよ。」

「おじいちゃん、ありがとう。みんなに話してやるよ。」

平泉寺



平泉寺は、平安密教の流れをくむ天台宗の寺で、寺伝によれば、天長^{てんちやう}？（八三〇）年、淳和^{じゆんわ}天皇が慈覚大師に命じて建立させたもので、源

頼朝は、野間へ墓参の際、当寺に立ち寄り、円月坊と称するよう命じたという。山号は鳳凰山。毎月28日護摩^{ごま}祈禱^{きと}が行われ、尾張不動尊のほか、県指定重要文化財の「毘沙門^{びしゃもん}天立像^{てんたつざう}・阿弥^{あみ}陀如来^{だにょらい}座像^{ざざう}」など平安時代の貴重な仏像がある。

第六話

兎の運んだ仏様

池上の紫雲

今から千二百年ほど前、弘仁^{こうにん}年間のことです。

比叡^{ひがい}山を開き、天皇の厚い帰依^{きえ}を受けた伝教^{でんきやう}大師（最澄^{さいしやう}）は、教えを広めるため、幾人かの伴人を連れて、全国行脚^{あんぎやう}の旅に出ました。その道すがら、ここ英比^{えいひ}の郷に足を踏み入れておりました。

秋の風が膚^{はだ}に心地よく、濃い緑が穏やかに包むなだらかな山ふところの池のほとりにさしかかったとき、大師はふと、歩みを止めら

れました。深々と青く澄んだ豊かな水をたたえたその池が、渡るそよ風の影を受けたように、中程にちりめんの細波を漂わせ、そこから妙なる音楽が流れ出ているのです。気のせい、馥郁とした名香の香りもしてきます。大師は、思わずひざまづいて、池に向かつて手を合わせ、一心に法華経を唱え始めました。

大師の突然なしぐさに、しばらくくげんな顔つきだった伴の僧たちも、次第に真剣な師僧の姿に打たれて、いつとはなくその背後にひざまづいて、唱和してゆきます……。

どのくらい、時がたったことでしょうか。突然、空に紫雲がたなびき、池の中から、「十方三世諸仏、一切の諸菩薩、百万の聖教、皆この阿弥陀仏をたたえたもう……。」と声が響き、池の中央から金色の光が立ち昇り、次第に四方へ広がってゆくのを、人々は見たのです。

あまりのありがたさに、人々は皆、地にひれ伏してふし拝みました。

その時です。突然、どこからともなく、真っ白な兎が走り出してきたかと思えると、その光めがけて、ザブーンと身をおどらせたのです。

そしてまだ、夢うつつに拝んでいる人々のところへ、何か小さな物をくわえてくると、そつと大師の手にそれを載せて、何度も振り返りながら去ってゆきました。

兎が池から運んできたのは、一寸七分の阿弥陀さまでした。そのお姿は、まことに尊く輝き、じつと、大師にほほえみかけておられました。

伝教大師は、早速、このできごとを都へ奏上されました。帝はたいへんお喜びになり、池のほとりに勅願寺を建て、兎養山長安寺と名づけるよう命じられました。大師も、一刀三礼して阿弥陀如来の木像を刻まれ、その胎



内に、兎が運んできたみ仏を納めて、寺の本尊とし、七堂伽藍の立派なお寺をお造りになりました。

そして、いつとはなしに、その寺の地名は「卯之山」と呼ばれるようになりました。

行安の発心

寛文6（一六六六）年の春さきのことでした。「これは、九兵衛さまではねえか。なんとまあ、野良着姿で、いったい、どうしなされたのかね。」

「おお、仁三郎さだのう。わしも実は、長いお城勤めをこの度おいとまいただいて、百姓をするため帰ってきたのだ。」

「そうですかい。それはええことだ。物知りのお前さまが帰ってきてくだされば、村の衆も、とても都合がよいわ。」

「まあ、これからはよろしゅう頼みますぞ……。」

ところで、あの道端の壊れかかったワラ小屋はなんだな。」

「ああ、あれか。あれは阿弥陀堂だわ。なんでも、大昔、兎がくわえてきたありがたい仏さまを中に納めたお木像をお祀りしてあるのだが、長い間手を入れなので……。」

「そうかい、もつたないことだのう。」

初めての慣れない農作業に疲れて帰ってきた佐野九兵衛は、その夜、仏さまの夢を見ました。

一匹の白兎を伴に従えられた阿弥陀さまが、金色の光を放って枕もとに立たれ、九兵衛の手をとられたのです。九兵衛は全身がジーンとしびれるような気持ちになりました——。

「のう、九兵衛さまが、阿弥陀堂の堂守りになって、あのお堂を再建なさりたいそうじゃ。」
「みんな今まで気にしていたこと、むしろもお手伝いをせねば……。」

近くの神田という所の弘誓院という寺で剃

髪して、行安と号した九兵衛は、毎日阿久比谷の村々を托鉢して回り、集まった浄財と村人たちの奉仕で、お堂は立派に再建されました。行安はその後、この堂を離れることなく、四十八夜別時念仏を修業したり、村人の相談相手となったりして念仏三昧の生涯を送ったということです。

弘誓院



菟養山弘誓院は卯

坂字仙入坊にあり、

浄土宗に属す。寺伝

によれば、天台宗開

祖伝教大師が北沢か

ら兎がくわえてきた

仏像を胎内仏とした

阿弥陀如来を本尊として、七堂伽藍五十坊舎の

菟養山長安寺を造営したが数度の兵火で消失、

その後、天文2年吞及が小庵を営み、浄土宗弘

誓院と号したが、元禄5年佐野正勝再建阿弥陀

堂の地へ移ったという。中興行安の木像がある。